

晴 曇 考

原 見 敬 二*

空に幾割かの雲量だけで決定される天気として快晴・晴れ・曇りの3種があって、別に薄曇りもあることは誰でも知るところです。ところで、曇りの字体は、太陽が雲にかくれている状態とみられますが、以下に述べるように曇りの語源は籠りと考えるのがよさそうです。

古代の中国でも狩猟採集社会から農業社会に移って農業祭祀が定着していました。それは、前14世紀ごろ殷王朝が出現して甲骨文字ができ、これで神意を占ったことが青銅器などで見られるからです。ですから、国の指導者は天体を観測して暦を作製し、それを農民に知らせる必要がありました。農民は大地の恵に感謝することから大地母信の信仰を持つようになって、立春や夏至などの24節氣に当たる日に豊作を祈る祭祀が行われるようになりました。蛇足ですが、この体制に反対する人達は、荒野に逃れて遊牧民となったと考えられています。

殷王朝で甲骨文字が出来たころの我が国は縄文時代でありまして狩猟生活をしていました。殷から周・秦・漢と代わって、古字体も周時代に金文、秦時代に隸書と進み、やがて漢字として、仏教伝来(552年)よりも早い4世紀ごろ我が国に渡来してきました。

雲の初文である云の字型は、尾を卷いた竜の形です。竜の上に、ぼつぼつと降る雨を冠せて雲になっていま

す。別に、晴れの日偏は、太陽の象形で祈りに関係があって、傍の青と併せて青空の多い状態を示しています。

日本神話では、太陽神である天照大神が天の岩屋戸に籠って、闇夜になった岩戸隠れのことが古事記(712年完)と日本書紀(720年完)に出ており、ともに「籠る」と書かれています。この「籠る」は、死亡・お産・月経などのときに行われて来たのです。このうち、産屋に注連を圍らす習慣が中国山地に伝わっています。産屋に籠って、お産の守護神である産神様を迎えるためです。また、社寺に参籠するのも「籠る」といいます。つまり、「籠る」とは外界との接触を断つということです。

さて、岩屋戸の前では多くの神様が集まって祭りを斉行します。なかでも、巫女の天宇受売命(アメノウズメノミコト)が胸乳などを出す踊りの結果、岩戸が開かれ、高天が原や豊草原の中つ国も照り輝く晴天を迎えました。これについては、日食説もあるようですが、よくわかりません。

ところで、晴れ着はお正月にも祭りの日にも着ますが、その前日には籠るのが通例でした。籠りが終われば、晴れの日を迎えることになります。また、冬籠りの後に春がきます。春と晴れとは、よく似通った文字です。このようなことから、曇りとは太陽が雲に籠っている状態であるとの解釈が成り立つと思われます。

* Keiji Harami, 神戸長田神社。